

## 【海外学会報告】

国際フランコフォニー学会 第33回世界大会参加報告  
 Conseil International d'Études Francophones (CIÉF)  
 33<sup>e</sup> congrès mondial, 17-23 juin 2019, Ottawa, Canada

国際フランコフォニー学会（CIÉF）第33回世界大会が、2019年6月17日（月）から23日（日）まで、カナダのオタワ大学にて開催された<sup>1</sup>。今大会の全体テーマ「*Marges et pouvoir de la francophonie*」は、カナダの言語的マイノリティとして「周辺化」されたフランコフォンの「力」を意識して設定されたようである。このテーマはとりわけ大会中の2件のテーブル・ロンドによって展開されていた。1つ目の「*Enjeux et défis de la création littéraire en français en contexte minoritaire au Canada*」というテーブル・ロンドでは、カナダ各州（ケベック州をのぞく）の5名のフランコフォン作家が登壇し、マイノリティ環境における創作活動の「苦勞」と「強み」が語られた。2つ目のテーブル・ロンドは、「*Former pour enseigner le français et en français en contexte linguistique minoritaire, plurilingue et pluriculturel : états des lieux et perspectives de recherche*」と題され、言語教育専門家4名によりカナダにおけるフランス語教員養成の現状と課題について議論が交わされた。

他の発表は例年通り多彩な内容で、約50のセッションにわかれて繰り広げられた。小松は「*Le pouvoir de l'enseignement : pédagogie du français et de la littérature francophone*」というセッション内で、「*La représentation de la francophonie dans les méthodes de FLE*」という個人発表を行った。フランス語教科書におけるフランコフォニーの扱われ方について歴史的経緯を概観したあと、フランスで出版され世界的に普及している最新の教科書3冊を比較し、フランス語教育の文化的コンテンツとしてのフランコフォニーの扱いに見られる特徴を7つのポイントにまとめて示した。CIÉF会員にはフランス語を教えている方が多いようで聴衆からの熱心な反応があった。セッションの司会はCIÉF幹事長Thierry Léger氏だったが、アメリカの大学でフランス語の教壇に立つ同氏からは、アメリカで出版されているフランス語教科書について

の興味深い指摘をいただいた。

最終日には、韓国ケベック学会 (ACEQ) からの唯一の参加者、Jong Hwa Jin 氏の発表があり、旧交をあたためることができた。同氏の発表は、「La fondation du pays face à l'histoire : représentation poétique des Rebellions des patriotes dans la poésie du pays」というタイトルで、仏系カナダ愛国者の乱の詩的表象が精緻に分析されていた。

大会中のエクスカージョンは、水曜午後のカナダ歴史博物館見学と、週末の先住民の夏至のお祭り見学の2件だった。日程の都合で残念ながら後者には参加できなかったが、歴史博物館は見応えがあった。団体入場後は自由見学だったが、最初に詳しいレクチャーがあったために理解が深まり、閉館までの時間があつという間に過ぎた。さらに大会プログラムの枠外であるが、作家でアカデミー・フランセーズ会員のアミン・マアルーフが、同じ週にオタワ大学の名誉博士号を授与され、その記念講演の席に CIÉF 大会参加者の希望者が招待されたため、貴重な話を聞くことができた。

金曜夕方には CIÉF 総会が開催され、活動・会計報告や新役員の紹介があった。次回第 34 回大会は 2020 年 6 月第 1 週にポーランド、グダニスクにて開催される。

大会概要は以上のとおりで、初夏のさわやかなオタワでの充実した素晴らしい 1 週間となった。実を言えば、月曜朝に会場のオタワ大学に向かうときには、とても張り詰めた気持ちだったのである。今回の大会への日本からの参加は一人であったため正直心細かったし、初日午後に発表を控えていたためである。しかし会場入り口で知人に会って一気に緊張が解け、その後次々に知り合いとの再会を喜ぶこととなった。2015 年の CIÉF 第 29 回大会開催責任者 (CIÉF 会長) であったサン＝ボンファス大学の Gaboury-Diallo 夫妻やフランコ・マニトバン作家 Léveillé 氏との再会は殊に嬉しかった。また次々に新しい出会いもあった。なかでも今大会責任者の Lucie Hotte 会長は素晴らしい方で、オタワ大学内の仏系カナダ文明研究センター (Centre de recherche en civilisation canadienne-française) 長を務める同氏は親切にこのセンターを紹介くださった。

オタワ大学はバイリンガル大学であり、学生の 3 割がフランコフォンで、7 割の授業が二言語で提供されているとのことである。学内の公用語・二言語主義研究所 (Institut des langues officielles et du bilinguisme) を訪問し、所長か

ら話をうかがうことができた。すでに夏季休暇に入り、緑豊かな美しいキャンパスは落ち着いた雰囲気であったが、学生らしき若者たちがフランス語で話しているのを耳にすることもあった。CIEF 大会会場建物の正面には、フランコ・オンタリオンのモニュメント（オンタリオ州内 16 か所に設置されているもののうちの一つ）が置かれていた。

余談になるが、今回は CIEF の団体予約ホテルの料金が高く、思いあぐねた末に市内の別の宿を予約してあった（例年どおり 300 室抑えてあったそうだが、100 室しか埋まらなかったという話を後で聞いて、申し訳ない気持ちになった）。フランス語の名前のついた B & B を選び、「もしや」と淡い期待をもちつつ到着したところ、予想は大当たりで、「生粋の”フランコ＝オンタリオンの宿で 1 週間を過ごすことができた。宿のパトロンから生のオタワ・フランス語事情を聞くことができ、大変興味深かった。また複数の CIEF 大会参加者と同宿となり、朝食時に交流できたのも楽しかった。

カナダでは連邦公用語法 50 周年を迎え法律近代化のための議論が各所で重ねられている一方で、各州マイノリティのフランコフォンたちが逆風にさらされている。とりわけ、オンタリオ州では昨夏のフォード州首相就任後にフランス語関係予算の削減が発表され、激しい抗議行動が展開されてきた。今回の大会に参加することによって、厳しい状況にもかかわらず、確固とした存在を示し続けるカナダのフランコフォンたちの活力を、強く実感できたことが何よりの成果であった。オタワ大学の研究者やジャーナリストらと大会の合間に面会し、貴重な話をうかがうこともできた。思えば、今回カナダの首都を訪れて多くの方と会ったが、ほぼフランス語だけで過ごしてしまった。英語を話さなくてはと渡航前に緊張していたのが嘘のようなものである。そういえば、トロント空港での入国審査の際には、Hello-Bonjour に Bonjour で返したところ、「フランス語が話せる同僚は隣の窓口だ」と案内されたのである。「いや英語でも大丈夫」と（移るのが面倒だったこともあり）答えたのだが、強く勧められ移動した。片言のフランス語を話す係りの男性は、満面の笑みで迎えてくれた。カナダの二言語主義を肌で感じることもできた経験であった。

（小松祐子 お茶の水女子大学准教授）

1 大会ホームページ：[https://secure.cief.org/wp/?page\\_id=46993](https://secure.cief.org/wp/?page_id=46993)